

## 村上小説における「女ことば」

### Women's language in the novels of Murakami Haruki

れいのるず秋葉かつえ

村上春樹は、「デタッチメントからコミットメントへの転換」を行った作家として知られている<sup>(1)</sup>。その転換は、作家としての村上春樹の実存に関わるもので、彼の小説にも大きく影響した。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（以下『世界の終りと』と略記することが多い）が代表する仮想現実世界のポストモダンな小説家が『ノルウェイの森』のようなリアリズム小説を書いてベストセラーになったことに、批評家たちは驚いた。80年代終わり、映画評論家の畑中佳樹は次のように書いている。「小説の本文からありとあらゆる固有名詞を蒸発させつくすことによって、世界を遠くから眺めているような、ある種の大気の希薄さのようなものをことばによって醸成する小説家だった。…… 名前がないという一事が、彼の独自性をつなぎとめる命綱だったような気がする。」そんな村上春樹が「固有名詞をむせ返らせた現実世界のいきれがする風俗小説—伝統的な風俗小説とはどこか違った風俗小説—に向かった」（畑中1989：138-142）と。しかし、固有名消去だけが前期村上小説の独自の手法だったわけではない。この論文では、村上春樹が「コミットメント」に向かうプロセスで小説手法においてもシュールからリアリズムへ転換したことに注目しながら、女性キャラクターたちのことばの変化を考察する。シュールな記号小説では、「固有名消去」と「会話文の過剰なステレオタイプ化」がディスコース戦略となるが、現実世界の問題にコミットするリアリズム小説においては、固有名を回復し、会話文も過剰なステレオタイプ化から後退せざるをえない。村上春樹のリアリズム小説では、「女ことば」の多様化の現象も起こっている。

## 1. 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』における「固有名消去」と「過剰な女ことば」

小説テキストは、固有名を完全に消去してしまうと、確かに、現実から浮遊した記号世界—現実の人間関係を生きているわたしたちに具体的な意味をもたない世界—の物語になってしまう。キャラクターたちに名前がない。物語が進行している場所を特定する固有名詞もない<sup>(2)</sup>。過去の物語なのか未来の物語なのか、歴史時間的にも漠としている。キャラクターたちの会話は、過度にステレオタイプ化されている。『世界の終りと』は、固有名消去と会話文の過度のステレオタイプ化の効果が最大限にたち頭われた仮想小説である。「ハードボイルド・ワンダーランド」と称する物語と、「世界の終り」という別の世界の物語が平行して進行する構成になっている。「ハードボイルド・ワンダーランド」(1章、3章、5章、……、39章)は「私」、「世界の終り」(2章、4章、6章、……、40章)は「僕」がそれぞれ主人公であり語り手である。

「私」「僕」にも、他の登場人物にも名前がない。彼らの会話は、自称詞と文末形式の組み合わせによって単純に記号化され、差異化されているので「会話文」の発話者が誰なのか、その区別はつく。大男の門番は「俺」を自称し「いろいろさ」のように、女性は使わないほうがいとされる助詞「さ」を多用する。生物学者の老人は「困るですよ」のような奇妙なデス・マス体を使う、というように。以下、女ことばの例を見ていこう。

### 1.1 「女ことば」の3つのパターン

女性キャラクター3人の会話文は、「断片文」「体言止め」「て止め」をのぞくと、すべて次の3つのパターンのいずれかにあたる。

- (1) [すぐく助かった] わ。[S-わ]
- (2) [祖父からあなたへのプレゼント] よ。[NOM-よ]
- (3) [すべて禁止されてる] の。[S-の]

(S=Sentence としてのステータスをもった構造、  
NOM=Nominal 名詞・名詞句または名詞節)

文末形式を言語学的にどう分析するかについては異論もあるが、ここでは、それを問題にしない<sup>(3)</sup>。この3つの例の示すパターンは、(3)を除けば、実際の会話で「女性は使うが男性は使わない」(話し手が女ことばのマネをしているか、性的に男性性を否定しているか、女性にアイデンティファイしている場合は別である)。その程度の常識的な意味で、これらを「女ことば」パターンと呼ぶことに問題はないだろう。

『世界の終りと』の女性キャラクターが興味深いのは、彼女たちの使う「女ことば」ステレオタイプ化の過剰性である。これら3つのパターンだけが繰り返かえし使われていて、結果として虚構くさいのである。現実のさまざまな会話場面をいやというほど録音してきたフィールド・ワーカーとしての経験から言えば、『世界の終りと』の女性キャラクターたちの「会話文」は、どうみても非現実的である。

## 1.2 交通信号のように次々に現れる「わ」

「女ことば」とは言っても、実際の女性の会話でこれらの「女ことば」形式が使われる場面は相対的に限られている。とくに(1)のパターンは今の若い女性の間ではほとんど使われない<sup>(4)</sup>。ところが、『世界の終りと』の女性キャラクターの会話では、このパターンがもっとも頻繁に使われているのである。「ハードボイルド・ワンダーランド」の17歳の女の子と語り手「僕」との会話(上巻pp.93-96)には、助詞「わ」で終わる文が次々に出てくる。

[1] 「すごく助かったわ」

[2] 「嘘なんかつかないわ」

[3] 「こんど会ったときにちゃんと教えてあげるわ」

[4] 「まともじゃないわ」

[5] 「残念だわ」

[6] 「じゃあとにかくエレベーターのところまで送るわ」

[7] 「私も知らないわ」

同じページの範囲内でタイプ (1) が 7 例、タイプ (3) が 3 例。残りは、質問文か、「体言止め」か「て止め」のような断片文。つまり、過剰にステレオタイプ化された「女ことば」なのである。「僕」の会話文のほうは、「まともな人間さ」「…という意味なんだ」「とてもおいしかったよ」という「男ことば」パターンで一貫している。鮮やかな対照である。おまけに、女の子は、「ピンクのスーツを着込み、ピンクのハイヒールをはいていた」とある。キャラクターたちは、会話文だけでなく、そうした記述によってもステレオタイプ化されている。

言語の脱性差化が声高だった時代、フェミニストたちは、ステレオタイプ化された女ことばは性差別の肯定、性差別の再構築・維持につながるものと主張し、小説家たちに「文学は性によるステレオタイプをもっとも敏感に嫌うはずではなかったのか」などと詰め寄ったものである。わたしが言語と性差別に関する研究運動でやってきたことのなかにも、そういう見方があった。女ことばをそういう風に解釈すると、過剰にステレオタイプ化された会話文で覆われている『世界の終りと』は、きわめて性差別的な文学であるということになる。果たして、そうなのか。この小説が全体に記号的であることを考慮すると、会話文の過剰なステレオタイプ化について別の見方が可能になる。

### 1.3 アニメ・キャラクターの会話

2009年村上春樹が客員研究員としてハワイ大学に滞在した時、レセプションがあった。わたしは、その時会話文のステレオタイプについて話してみようとした。「It is just to construct characters…」と返事がはじまりかけたところへ、学生たちが数人集まってきて話は中断された。Construct characters……キャラクター作り……。Just to construct characters……。このことばがわたしの頭のどこかにずっとひっかかっていた。数ヶ月後、それが「キャラ作り」というマンガ・アニメ業界用語と結びついた。マンガ工房では、キャラクター作りのためのパターンのリストをデータとして用意してあって、そこから選んだパターンの組み合わせでキャラクターを作るのだ、

と。それをマンガだけでなく小説でもやれるのだということに気づかせてくれたのが『キャラクター小説の作り方』(大塚2003)であった。村上春樹自身は、マンガ・アニメの影響を否定している<sup>(6)</sup>。しかし、彼のシュールな手法がマンガやアニメの手法と質的にまったく別のものだと考える必要はないだろう。ポストモダンの時代状況がマンガやアニメに共通の記号的な表現スタイルを求めていたのだとすれば、文学小説作家が同じ手法を実験したとしても少しも不思議ではない。時代の<sup>d r i f t</sup>流れである。

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』のキャラクターたちが、漫画やアニメに似たキャラクター小説に近いとすれば、そこで動くキャラクターたちは、アニメのキャラクターたちのような不思議な声で、記号的なことばで話すだろう。だとすれば、この小説世界での「女ことば」は、現実世界の階級やジェンダーや差別の反映ではなく、単なる弁別的記号……<sup>(6)</sup>。あるいは、例の「シミュラクル」というオリジナルなきコピー……<sup>(7)</sup>。作家は、はじめにアニメキャラクターの動き回る仮想世界を空想し、人間の声とは違った声の会話、つまり、キャラクター・ヴォイスを会話文に表現しようとしたのではないか。そう考えられるくらい『世界の終りと』のキャラクターたちの会話文はアニメ的でありマンガ的なのである。

もちろん、キャラクター作りの基本的なパターンは現実と無縁ではない。ステレオタイプはステレオタイプである。作家がキャラクター作りのための基本的な弁別素性の一つとして[S-わ]を使っているつもりでも、その記号はまったく任意の記号ではない上に、作家の意図がそのまま読者に理解されるとはかぎらないからだ。小説は作家がいて読者がいて成り立つ。小説が売れるためには読者のほうが大事だとさえいえる。文字化された会話文を読者がどう音声に翻訳し、どういう意味をあたえながら読むのか。言語の脱性差化運動にとってはそこが問題なのだ。小説の中の「女ことば」をどう扱うか、むずかしい課題である。

## 2. 「非リアリズム」から「リアリズム」へ

80年代終わり、村上小説のシュールな記号性を高く評価する批評家は少な

くなかった。しかし、逆に、その記号性を強く批判する批評家もいた。柄谷行人がその一人である。テキストを「外部性」(現実社会)に繋げるのは固有名であるとし、固有名の文学手法としての機能を重要視してきた柄谷は、固有名消去を「名前によって喚起される経験的な世界を単なる記号の世界に単純化してしまうテクニックだ」とし、村上春樹の小説にトータルに反発した。「現実性からの逃亡」である(柄谷1995:134)、と。

デヴュー当時の村上春樹に現実逃避志向がなかったとは言えない。村上自身が回想している。「いろいろな社会とかグループとか団体とか規制とか、そういうものからほんとに逃げて逃げて逃げまくりたいと考えて……結局ただ、ひとりで小説を書いていました。……ヨーロッパに三年くらいいて、一年間日本に戻って、それから今度はアメリカに三年少しいて、その最後の頃から逆に、自分の社会的責任感みたいなものをもっと考えたいと思うようになって来たんです」<sup>(8)</sup>。「固有名の回復」「会話文の脱ステレオタイプ化」を通してリアリズムに向かったのと同時期であった。

## 2.1 固有名の回復

デヴュー作以来ほぼ一貫して顕著だった固有名消去ストラテジーは、『世界の終りと』(1985)で極致に達し、そのあとの長編小説『ノルウェイの森』(1987)で一変する。「固有名の回復」である。たちまち350万部ベストセラーになった、このラヴ・ストーリーには人の名前、地名が溢れている。

まず、語り手としての「僕」にも「ワタナベトオル」という名前がある。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』までの「僕」や「私」はそうでなかった。『ノルウェイの森』では、「直子」を始め、「緑」「キズキ」「レイコさん」「永沢さん」「ハツミさん」など、キャラクターたちのすべてに名前が与えられている。それだけではない。物語が進行する場所も、「僕」の背景に流れる音楽も、なにもかもが固有名詞によって具体化されている。

物語は、「僕」が乗った「ボーイング747」が「ハンブルグ空港」に着陸しようとしているところから始まる。

飛行機が着地を完了すると禁煙のサインが消え、天井のスピーカーから小さな音でBGMが流れはじめた。…ビートルズの「ノルウェイの森」だった。(上巻p.7)

読者にとってなじみの飛行場風景、なじみの音楽だ。(わたし自身70年代初め日本を出るときにどこかに紛らわせてしまったビートルズのLP版のことを思い出しました。『ノルウェイの森』の読者の多くが似たような情緒的経験をしたのではないのでしょうか。)

「僕」は日本での私的な出来事をハンブルグ飛行場で回想し始める。「僕」が「中央線の電車のなかで」偶然「直子」と出会い、「四谷駅」で電車を降りて歩き始めた時の情景は、こうだ。

飯田橋で右に折れ、お堀ばたに出て、それから神保町の交差点を越えてお茶の水の坂を上り、そのまま本郷に抜けた。そして都電の路線に沿って駒込まで歩いた。(上巻p.42)

東京で学生生活をおくったことがある読者なら周知の場所の名前であり、風景である。(わたしは、日本に行くと今でも必ず神田に行きます。そしてお茶の水の坂を上ってみます。)読者は、現実の世界の場所やモノにつけられた固有名詞に導かれて、お茶の水の坂道にあるそば屋、楽器店、喫茶店までもついでに思い浮かべながら物語に惹き込まれて行くだろう。「あつというまに読める楽な本だったよ」というインターネット・コメント<sup>(9)</sup>が示すように、『ノルウェイの森』の魅力は、わかりやすさだった。だからこそ、圧倒的に幅広い層の読者を捉えて、「ブーム」を巻き起こしたのであろう<sup>(10)</sup>。

## 2.2 リアリズムの実験としての『ノルウェイの森』

『ノルウェイの森』は、確かに固有名溢れるリアリズム小説だが、転換への第一歩にすぎなかった。「社会的責任のようなもの」が何なのかまだ見えてこない。「アメリカにいるあいだ、何にコミットすればいいのか、これか

らどうすればいいんだろうって僕はうんふん考えてきたつもりなのです。ところが、日本に帰ってくると、やっぱり何にコミットしていいかわからないんです」<sup>(11)</sup>。前期小説の固有名消去法を厳しく批判した柄谷行人は、固有名小説と言ってもいいほど固有名詞を取り入れた『ノルウェイの森』についても、「たんにロマンス（愛と死をみつめて）を書いただけである」（柄谷 1995 : 135）として、前期小説ほどにも価値を認めない。村上春樹自身も、『ノルウェイの森』を文学的な作品としてそれほど重要視していなかったようだ。「とにかく百パーセント・リアリズムの手法で小説を書いてみようと思ってみました。そうすることが一つの実験として、僕には必要だと思ったから」とジョン・レイとのインタビューで話している<sup>(12)</sup>。『ノルウェイの森』は、村上春樹の実験作品であったのだ。

Commitmentへの転換点としてもっとも<sup>crucial</sup>重要だったのは、村上自身も述べているように、『ねじまき鳥クロニクル』（1994）だった。そこに織り込まれた「間宮中尉の長い話」には、ノモンハン事件で死んだ日本兵の恐怖が読むに耐えないほどリアルに描かれている。（「北支那」に駆り出されたわたしの父や、南方で捕虜になった叔父の経験談を身の縮む思いで聞いた記憶—わたしのなかにもある歴史です<sup>(13)</sup>。）村上春樹は1995年1月神戸地震のニュースをマサチューセッツ州ケンブリッジで聞いた。3月に一時帰国していた時に地下鉄サリン事件のニュースを聞いてすごくショックだった。「日本に帰国して自分の国のために、自分の読者や自分の同郷人のために何かしなければならない」と感じたという<sup>(14)</sup>。6月には帰国の途についた。震災復興期の9月には「ささやかだけど、できることをとって」芦屋市と神戸市で自作作品の朗読会をしている。彼としては異例の活動だった。1996年1月には地下鉄サリン事件の被害者62人のインタビューを開始、翌年『アンダーグラウンド』として発表した。その後オウム真理教の信者（元信者）にも同じようなインタビューを行い、雑誌に発表し始めた。後に『約束された場所で—underground 2』となったものである。

小説家村上春樹の初のノンフィクション『アンダーグラウンド』『約束された場所で—underground 2』を、わたしは自称詞研究のデータとして使い始め



ていた。東京で働く普通の日本人（62人+オウム真理教信者8人）をこんなに注意深くていねいにインタインタビューし、正確にテープ起こしできる社会言語学者をわたしは知らない。インタビュー（インタビューを受けた人）を傷つけないように、細心の注意を払いながらすすめられたインタビューのテープ起こしからは、その緊張が伝わってくる。日本の現実にしかりととりくんでいくなかでコミットメントの対象が見えてきたのではないか。

### 2.3 会話文の「脱ステレオタイプ化」、あるいは、「現実接近」

固有名の回復とともに、会話文のステレオタイプ化にも意味深い<sup>significant</sup>変化がみられる。厳密なテキストカウントをするゆとりはないが、『ノルウェイの森』（1987）、『スプートニクの恋人』（1999）、『神の子どもたちはみな踊る』（2000）、『1Q84』（2009）など、後期作品の会話文によって「女ことば」の「過剰なステレオタイプ化」からの後退を観察しておこう。女性キャラクターたちの会話文に現実味が濃くなっていく。

『ノルウェイの森』の女性キャラクターの会話文では、前述の3パターンのうちの（1）が減る。さらに、新しく「わ」と「よ」を複合した「わよ」で終わる次のようなパターンが登場する。

[8] もう涙がこぼれちゃうわよ。（緑、上巻p.144）

[9] もちろんそれほど上手くないわよ。（レイコさん、上巻p.254）

上昇調の「わ」が自己主張の弱い「女らしさ」の表現であるのに対し、「よ」は相手への働きかけ機能が顕著な助詞であり、「よ」で終わる文は自己主張を示唆する<sup>(15)</sup>。「わよ」には、自己を主張しつつもなお「わたし=女」というアイデンティティだけは残しておこうとする女性の屈折した心理が働いている。「わ」が消去された段階では「もちろんそれほど上手くないよ」となり、多くの女性たちが親しいもの同士での会話で遠慮なく使っている「普通体」になる。

「だから、サングラスかけるわけ」という[S-わけ]パターンも見られる。

[S-の] パターンは、「女ことば」だが、「の」を「わけ」に置き換えれば、もはや「女ことば」でも「男ことば」でもない<sup>(16)</sup>。「新潟まで行った」のようになまったく助詞のない言い切り文(S)もジェンダーレスである。関西弁を使うキャラクターも出てくる。女性キャラクターのものがワン・パターンでなくなってきたという点でも現実の言語使用状況に近づいていると言える。『神の子どもたちはみな踊る』(2000)では、ジェンダー・マーカのない文が女性キャラクターによっても男性キャラクターによっても使われる。

[10] 急にじゃなくてさ、さっきちょっとそんな気がしたんだ。(p. 67)

[11] 今までは気にならなかった。でも今はなぜか不思議に気になるんだ。  
(p. 43)

例[10]は、「アイロンのある風景」に出てくる順子という女性キャラクター、[11]は「UFOが釧路に降りる」に登場する小村という男性の発話である。文字化された会話文でみるかぎり性差はない。日本文化では、差別的な思考が容易に崩れないという現実がある一方、男と女のことばの差異化が求められる場面が少なくなり、男も女も似たような話し方をする場面が増えてきてもいる<sup>(17)</sup>。村上春樹リアリズム小説の女ことばはそうした現実社会の変化を反映していると言えよう。

物語の主人公すみれ(22歳)とミュウ(17歳年上の既婚女性)の「広大な平原をまっすぐ突き進む竜巻のような激しい恋」の物語『スプートニクの恋人』、長編小説『1Q84』において、この傾向はいつそう顕著になる。『1Q84』に登場する17歳の「ふかえり」という少女は、まるで日本語の性差を脱構築するためのエイジェントのようだ。ジェンダー・マーキングの罫がありそうなカテゴリーには立ち入ろうとしない。「ふかえり」と「僕」(予備校数学教師の天吾、「ふかえり」の書いた小説のエディティングを請け負っている)の会話は、こうである。

[12] ふかえり あなたのこと知っている

天吾            僕を知ってる？  
 ふかえり      スウガクをおしえている  
 天吾            たしかに  
 ふかえり      二カイきいたことがある  
 天吾            僕の講義を？  
 ふかえり      そう

(BOOK1 p. 84)

「ふかえり」の会話文は不思議な感じをあたえる。コミュニケーションの基本的機能の一つである「相手にたいする働きかけ」が表示されていない。日本語会話文としては、機能不全とも言える。「彼女の話し方にはいくつかの特徴があった。修飾をそぎ落としたセンテンス、アクセントの慢性的な不足、限定された（少なくとも限定されているような印象を相手に与える）ボキャブラリー」(BOOK1 p. 84)、という天吾の観察が地の文にある。「ふかえり」は、明らかにジェンダー・マーキングが起りそうなカテゴリー（自称詞、デスマス、助詞）を回避している。

### 3. 確かなCommitment へ向かって—現実世界の真ん中を渡り歩く

村上小説の描く世界が「名前のない世界」から「名前のある世界」へ変わった事を敏感に感じとった畑中佳樹は、村上春樹のコミットメント志向をも感じとっていた。リアリズムは世界に対して固有名詞的につながろうとする意志だとして、リアリズムへの転換（転向？）を暗に肯定しつつ、同時に、それによって村上春樹（あるいは、小説）が生き延びられるとは断定しない。名前の回復は、「現実世界の真ん中を渡り歩こうとする村上春樹の新しい生存の技術」だ、と言うだけであった（畑中1989：143）。

2009年、村上春樹がエルサレム賞をあえてacceptし、堂々とイスラエルの軍事政策批判を行ったのに、わたしは驚いた。“Between a high, solid wall and an egg that breaks against it, I will always stand on the side of the egg.” 社会的どころか政治的でさえある。自分に賞を授けてくれたイスラエル当局に向かって、貴軍の爆弾、戦車、ロケット弾、白リン弾は「高く

て固い壁」、それによって押しつぶされ、焼かれ、銃撃を受ける非武装の市民たちは「卵」のようなもの、わたしは卵サイドにつきます、と断言したのである。さらに、2011年、3月11日の東日本大震災。原発問題で世界中が揺れた。6月9日、村上春樹がカタルーニャ国際賞を受賞したというニュースが入った。受賞スピーチ「非現実的な夢想家として」は感動的だった。〈原爆の惨禍を経験した日本人は核に対する「ノー」を叫び続けるべきだった〉と明言し、〈戦後日本の核に対する拒否感をゆがめたのは「効率」を優先する考えだ〉、〈政府と電力会社が原発を国策として推進し、原発に疑問を持つ人々が「非現実的な夢想家」として退けられたからだ〉と批判したのである。エルサレム賞受賞スピーチといい、カタルーニャ国際賞受賞スピーチといい、確かに村上春樹は「現実世界の真ん中」を渡り歩いている。難しいスタンスである。

#### 注

\* This is the revised version of the paper presented at the 5<sup>th</sup> Ukraine Open International Symposium “Languages, Literatures and Cross-cultural Communications” at Taras Shevchenko National University, Kyiv, Ukraine. March 22, 2013.

- (1) 河合・村上 (1996) など、最近の対談集で村上春樹自身が詳しく述べている。
- (2) 「それも東京のど真ん中の話なのだ」(上巻p. 42) という一文があるだけで「四谷」「新宿」「青山」など具体的な地名は一切ない。「ワンダーランド」が東京の何処かであるらしいことはわかるが、それ以上の情報はない。「ワンダーランド」の最後の章(下巻 p. 39) が急にリアルな場所になる。「日比谷公園のわき」に車を止めたり、「銀座通りは、ビジネス・スーツを着た人々でいっぱい」だったり。
- (3) キャラクターたちの会話文のステレオタイプ・パターンについてはReynolds (2005) 参照。
- (4) 終助詞「わ」については、Kitagawa (1977) が上昇調で発音される女ことばと、男性にも使われる普通に下降調で発音される「わ」を区別している。少なくともなっているのは前者である。

- (5) 村上(2010 : 230)。
- (6) ここで、金水敏の役割語との関連・異同が問われるが、今回は紙幅の関係で言及しない。
- (7) フランスのポストモダン哲学者ジャン・ボードリヤールがソシユール言語学・記号学を一つの知的リソースとして考えだした概念。
- (8) 河合・村上(1996 : 14-15)。
- (9) <http://mimizun.com/log/2ch/books/996467230/> (2011. 12. 23)。
- (10) 『ノルウェイの森』は、2009年の時点で国内総発行部数1000万部を突破したと伝えられている。
- (11) 河合・村上(1996 : 19)。
- (12) 村上(2010 : 198)。
- (13) 「北支那」(それがどこだったか知らない)で終戦を迎え「生き延びたー」と思ったそう。部隊のコンテストで「終戦だ はらからしのべ ほがらかに」という句を煙草の空き箱に書いて出し、褒美をもらったというのが自慢だった。叔父は南方で捕虜になった。
- (14) 村上 (2010 : 161) 。
- (15) ローマン・ヤコブソン(Roman Jakobson)は、コミュニケーションの立場からみた言語の6機能を提案した(Jakobson 1960)。その一つが conative function (働きかけ機能)である。日本では、社会言語学の鈴木孝夫がヤコブソンの6機能をとり入れて「あいさつ行動」を分析している(鈴木1981)。
- (16) だいぶ前から[S-の]を男性が使う場面も増えてきた。男性の側からの中性化も進行してきている。
- (17) 「女ことば」「男ことば」の境界域は一般に考えられているほどはっきりしたものではない、両者の間に幅広い共通域があるということは、あちこちで述べてきた。たとえば、Reynolds (1990)。

#### 引用文献

- 大塚英志 (2003) 『キャラクター小説の作り方』 角川文庫
- 柄谷行人 (1995) 「村上春樹の『風景』」 『終焉をめぐる』 講談社学術文庫 (初出は、『海燕』 1989 11・12月号)

河合隼雄・村上春樹 (1996) 『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』 岩波書店 (新潮文庫1999)

鈴木孝夫 (1981) 「あいさつと言葉」 『ことばシリーズ』 文化庁

畑中佳樹 (1989) 「村上春樹の名前をめぐる冒険」 『ユリイカ』 21-8 pp. 138-143 青土社

村上春樹 (2010) 『夢をみるために毎朝僕は目覚めるのですー村上春樹インタビュー集 1997-2009』 文芸春秋

Jakobson, Roman. (1960) Closing Statement: Linguistics and Poetics. In Sebeok, Thomas A. (ed.), *Style in Language*. pp.350-377. Cambridge, MA: The M.I.T. Press.

Kitagawa Chisato. (1977) A source of femininity in Japanese: in defense of Robin Lakoff. *Papers in Linguistics*, 10, pp. 275-98.

Reynolds, A Katsue. (1990) Female speakers of Japanese in transition. In Ide S. and N. McGloin (eds.) *Aspects of Japanese Women's Language*. pp.129-146. Tokyo: Kuroshio Shuppan. Also <<http://hdl.handle.net/10125/21979>>.

Reynolds, A Katsue. (2005) Direct Quotation in Japanese: A Site for Stereotyping. In *Proceedings of the Twenty-third Annual Meetings of the Berkeley Linguistics Society*. pp. 215-228. Berkeley: Berkeley Linguistics Society. Also <<http://hdl.handle.net/10125/18767>>.

言語観察に使った村上春樹の作品：『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 『ねじまき鳥クロニクル』 『神の子どもたちはみな踊る』 は新潮文庫、『ノルウェイの森』 『アンダーグラウンド』 『スプートニクの恋人』 は講談社文庫、『約束された場所でーunderground 2』 は文春文庫、『1Q84』 (BOOK1-BOOK3) は新潮社 (2009-2010)。

(れいのるず あきばかつえ・ハワイ大学)